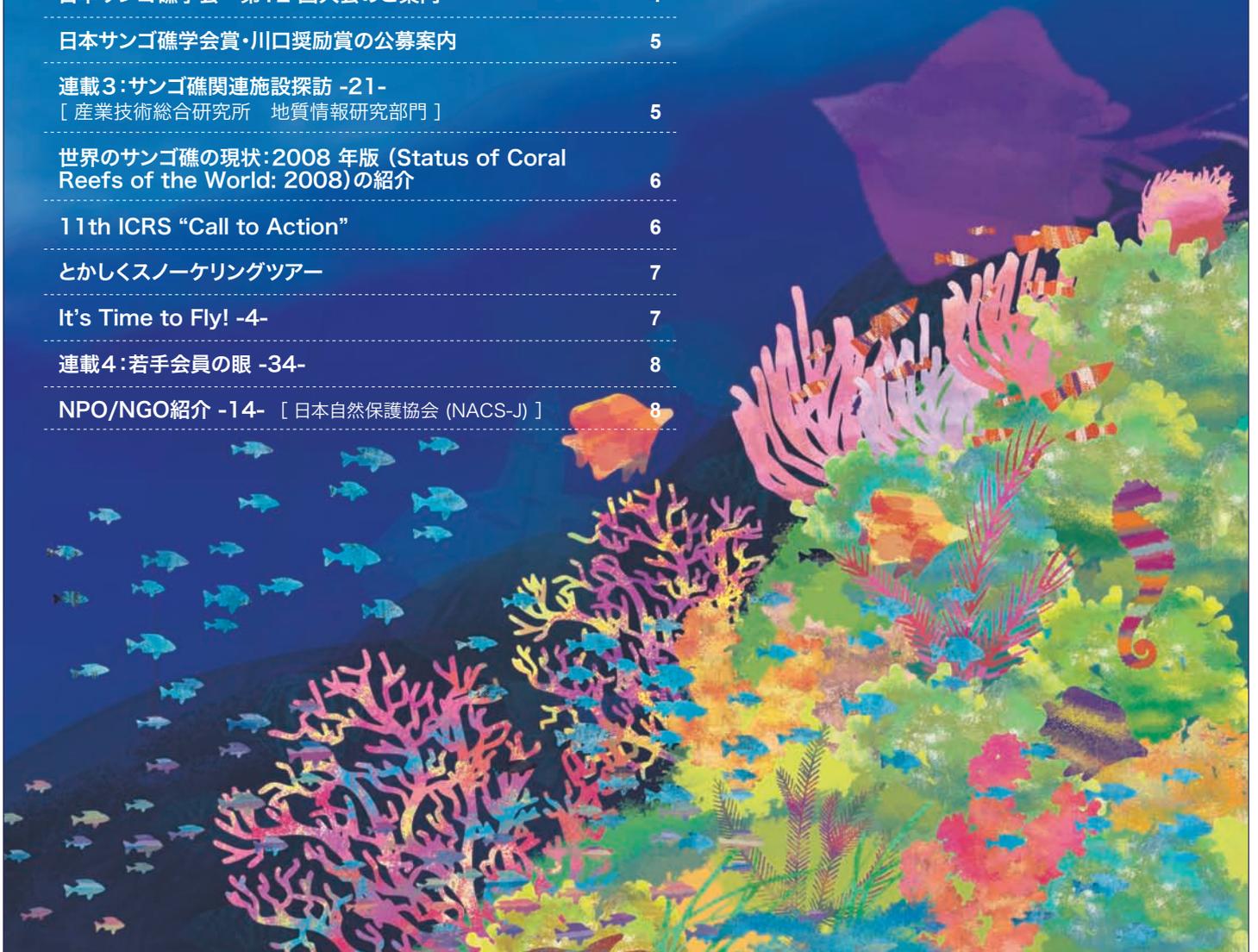


# Newsletter of Japanese Coral Reef Society

## contents

page

連載1:サンゴ礁に暮らす人々 -27-	2
連載2:しらほサンゴ村だより -2-	2
日本サンゴ礁学会 評議員会報告	3
日本サンゴ礁学会 会長・評議員選挙結果報告	3
日本サンゴ礁学会 第12回大会のご案内	4
日本サンゴ礁学会賞・川口奨励賞の公募案内	5
連載3:サンゴ礁関連施設探訪 -21- [ 産業技術総合研究所 地質情報研究部門 ]	5
世界のサンゴ礁の現状:2008年版 (Status of Coral Reefs of the World: 2008)の紹介	6
11th ICRS "Call to Action"	6
とかしくスノーケリングツアー	7
It's Time to Fly! -4-	7
連載4:若手会員の眼 -34-	8
NPO/NGO紹介 -14- [ 日本自然保護協会 (NACS-J) ]	8



## 連載1 サンゴ礁に暮らす人々 -27-

### 北限のサンゴ礁に生きた縄文人 慶應義塾大学名誉教授 近森 正

「ちょうどイルカの群れに出くわした。奴が空中に飛び上がったところを、狙い撃ちして、思いっきり刺したんだ。」

漁からもどる男の村は、大きな湾の東北、ずっと奥まった入江に面している。彼が操る丸木舟の底には、体長が2メートルにもなるイルカが頭横たわっている。その重みで舷側が深く沈み、時折、舳先の方から水が入ってくる。背びれが鎌状になっているから、スズイルカではなく、マイルカではなかろうか。頭部にはまだ、鋸が刺さったままだ。

このあたりの入江には、けして一面にはないが、サンゴ礁がひろがっていて、そこに生息する餌を追って、イルカの群れが入りこんでくることがある。久しぶりの大物だった。カヌーの中にはマガイ、クロダイ、ヘダイ、ブダイなどの獲物が数尾はいつている。

「釣りの方はさっぱりダメだったね。小物ばかりさ。」

權を漕ぐ男の足下には小さな籠が置いてある。その中にサンゴの破片が詰まっている。

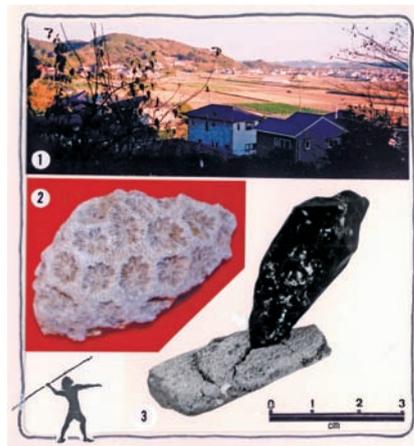
「うん、これかい？ 鹿の角で釣針を作るときに、このサンゴの枝で擦って仕上げるのさ。」

でもキクメイシのような塊のサンゴは一体、何に使うのだろう。尋ねそこねてしまった。火に入れて粉にし、白色顔料にでもするのだろうか。

「明日は、嫁いでいった娘の家族にもイルカの肉と一緒に、そいつを届けてやろう。」男はそう呟くと、權を水中に深く差入れてピッチをあげた。

西に傾いた陽光が周辺を包み込み、男の姿は波しぶきが作り出す金色の渾沌の中に吸い込まれて、見えなくなってしまった。振り返ると、いまは東京湾と呼ばれる海のむこうに、大きな富士がシルエットを浮かび上がらせていた。近くの丘の崖には化石化したサンゴの露頭がうっすらと白く光っていた。

男が捕獲したイルカの骨は、黒曜石の鋸が刺さったまま、村の裏手にある稲原貝塚に残っていた。



鋸先は長さ5センチくらい。粗いつくりだが、イルカの肩の厚い皮と肉を貫通して、見事に橈骨を突き刺している。年代測定の結果、6700年前ごろのものであることが判明したのである。

東京湾の入口、館山湾に暮らした縄文時代早期の人々は、氷河期が終わったあと、世界でもっとも北に進出したサンゴ礁の民であった。

写真：稲原貝塚は東京湾口、館山湾の東北にあって、現在の海岸線から1.5キロ東に入った標高40メートルの台地斜面にある(写真1)。今ではこのあたりには棲息しない暖海性(亜熱帯種)のハイガイやシオヤガイが貝塚から出土している。そのほかにマガキ、オキシジミ、ハマグリ、アサリなどの二枚貝が目立つから、辺りの入江は砂泥性の干潟だったのだろう。

発掘調査によって縄文時代早期の茅山式土器、子母口式、田戸上層式土器などが出土した。貝層から出土した魚骨はマガイ、クロダイ、ヘダイ、スズキ、ボラ、マグロ、ブダイ、アジ、エイ類、サメ類など。獣骨はイノシシ、ニホンジカ、タヌキ、イヌ、それにウミガメ、ツルなどの骨も見つっている。年代を測

定したのはキクメイシ(写真2)と一緒に出土したケヤキ属キヤキ科 *Zelkova serrata* の炭化木材。放射性炭素による測定結果は6800±140yBP ( $\delta^{14}C$ )、補正年代値  $\Delta^{14}C$  は6780±140yBPである。黒曜石の鋸の先端が刺さったイルカの骨(写真3)も同じ層から発見された。

東京湾岸の縄文時代の遺跡から発見された造礁サンゴについて、分類名が報告されているのはアオバイボヤギとキクメイシだけである。館山市稲原貝塚からの出土例のほかに、キクメイシを出土したのは市川市堀之内貝塚、曾谷貝塚(加曾利B1期)、向台貝塚(出土した4点のうち2点は加曾利E1期、他の2点はE1期)、船橋市古作貝塚、塚田貝塚、埼玉県黒谷貝塚、川

崎市子母口貝塚、横浜市下田西貝塚、万田貝塚、東京都大田区の千鳥久保貝塚など。アオバイボヤギを出土したのは千葉県市の園生長者山貝塚。アオバイボヤギとキクメイシの両方が発見されたのは市川市の根古谷貝塚、姥山貝塚(堀ノ内期)である。それらは縄文時代の早期から後期にまでわたっている。これらの遺跡がある東京湾奥部は、この時代に造礁サンゴが生育するような環境であったとは考えられないので、それらは人の手によって運ばれたものか、海流によって運ばれたのだろう。加工を施したものはまだ見つっていない。なお、東京湾ではないが、神奈川県秦野市砂田台遺跡からも弥生時代の宮の台期に属するサンゴが発見されている。

## 連載2

### しらはサンゴ村 だより -2-

上村 真仁



写真：上) 白保のアオサンゴ群落(2002年)  
下) 白保中学校生徒による赤土流出防止対策月桃植え(2009年)

この連載では、サンゴ村の取り組む地域住民主体のサンゴ礁保全と持続的な資源管理について詳しくご紹介したいと考えています。しかしその前に、これまでの白保サンゴ礁の保全を取り巻く状況を振り返ってみたいと思います。サンゴ礁保全を進

めていく上で大切な視点が含まれているからです。

白保サンゴ礁が広く注目されるようになったのは、白保地先の海、イノー(礁池)の埋め立てによる新石垣空港の建設が発表された1979年にさかのぼります。半農半漁の暮らしの中で、早魃で農作物が採れないときや戦争で畑仕事が出来ないときに海の恵みに助けられた人々は、「命継ぎの海」を守るため空港建設に反対します。公共工事を止めることは、不可能と考えられていた時代、小さな村の反対運動が全国に広がりました。

WWFジャパンは、白保のサンゴ礁の保全を重視し、1985年に「白保の海学術調査班」に資金援助を行いました。その結果、大規模なアオサンゴ群落を含む、貴重なサンゴ礁であることが明らかとなりました。当時、沖縄各地でサンゴが壊滅的な状態であったことから、奇跡の海と呼ばれました。IUCN(国際自然保護連合)は、県と国に計画を見直すよう2回の勧告を行いました。依然として埋め立て計画が進められました。

長期化する空港問題の中で、サンゴの保護=空港反対という図式が出来上がりました。白保では賛成、反対で村が二分され、親子や兄弟でも口を利かず、豊年祭や生年祝い、成人式も分かれて行われました。空港問題に翻弄される中、保全活動は停滞し、土地改良事業の失策による赤土流出など環境負荷の増大により、サンゴが著しく減少しています。

私たちは、こうした空港問題から何を学ぶことが出来るでしょうか？

「サンゴの熱」(空港反対に熱心に取り組んだ頃のことを白保のおばあはこう呼びます)のように地域が一つになり海を守ろうと意思決定を下すには何が必要か、村を分かたずに協力し保全を進めるためにはどうすればよいか、ここから多くを学び取ることが出来ます。何より地域の合意形成が無ければ、自然を守り、地域を維持することが困難だということを知りました。

しらはサンゴ村では、白保サンゴ礁が未来にわたり健全に受け継がれることと同じく、白保集落の人々がこの海とともに心豊かに暮らし続けられることが重要だと考えています。

こうした考えに基づき、地域に伝わるサンゴ礁資源の利用に関する知恵や技、人々の海への思いを掘り起こし次世代に伝える「白保今昔展」を始めました。さらに、2004年からは人々の主体的なサンゴ礁保全活動を促進するための「人づくり」「組織づくり」「産業づくり」を柱とする持続的な地域づくりを展開しています。

新石垣空港の位置が見直され空港設置許可が出された2005年ごろようやく村は落ち着きを取り戻しはじめました。今、白保では、サンゴ礁保全を核としたコミュニティ再生が始まっています。

WWFサンゴ礁保護研究センター(しらはサンゴ村)  
沖縄県石垣市字白保118  
9:00-17:00(入館無料) 水曜日、年末年始休館  
TEL: 0980-84-4135 kamimura@wwf.or.jp  
http://www.wwf.or.jp/shiraho/  
http://www.sa-bu.com/

## 日本サンゴ礁学会 評議員会報告

### ▶ 今号から評議員会の議事録はダイジェスト版で掲載することになりました。

議事録の全文は Web 上で公開いたします。詳しくご覧になりたい方は学会のホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>) の menu から「学会案内」をクリックし、「学会評議員会議事録」へお進みください。なお、議事録閲覧にはパスワードが必要です。会員以外の方にはパスワードを知らせないようお願いいたします。Web 上には前回と今回の議事録が掲載されています。

パスワードは、  
2008 年 11 月 21 日静岡大会での  
評議員会議事録パスワード: **ajisai081121**  
2009 年 7 月 4 日の  
評議員会議事録パスワード: **TR1C3F336**  
です。

### 評議員会議事録ダイジェスト

日時:平成 21 年 7 月 4 日 (土)  
14:00 ~ 17:00  
場所:東京大学

### 1. 2008 - 2009 年度活動報告

- ①事務局: 会員動向は会員 537 名、会費滞納による退会 15 名、賛助会員 1 減。会計は 2008 - 2009 年度半年度で約 109 万円の赤字。純残高は約 60 万円。このままでは破産の恐れあり。
- ②企画委員会: 学会編「現代サンゴ礁学の展望」の出版準備中。10th ICRS プロシーディングスは 46 部を販売、54 部残。さらなる販売・購入協力を依頼。
- ③学会賞選考委員会: 川口賞、学会賞の公募を開始。
- ④学会誌編集委員会: Galaxea 11-1 (8 編) を編集。学会誌は J-STAGE にて公開中。
- ⑤広報委員会: ニュースレター No.40、No.41 を発行。第 2 回サンゴ礁保全推進協議会総会で学会紹介のブース出展。
- ⑥国際連携委員会: アジア太平洋サンゴ礁学会について体制づくりを模索。
- ⑦保全委員会: 保全再生プロジェクトチーム (以降 PT と表記) は学会和文誌 (10 巻) にサンゴ移植の現状と課題を掲載。広域一斉調査 PT は 154 箇所を調査を、2008 年 9 月までに終了。成果

は、WWF ジャパンのサイトで公開し、学会 Web からリンク予定。普及啓発 PT は普及の「戦略地図」作成を環境省事業と連携検討中。沖縄県自然保護課事業で観光レジャープログラム集と環境教育・普及啓発プログラム集が発行。「日本の珊瑚礁 50 選」作成検討中。リアルタイム水温観測網の構築中。川口四郎先生の科学南洋遺稿の英文翻訳中 (学会誌掲載予定)。次回大会で、研究者のためのインタープリテーション講座を計画。

- ⑧安全委員会: 昨年度静岡大会で安全講習会を開催 (講師: 野澤 徹氏)。NOAA の安全チェック表の和訳、学会版の作成・検討を開始。
- ⑨用語委員会: 地形学辞典の原稿を依頼中。
- ⑩選挙管理委員会: 会長・評議員会選挙を実施。有効投票数は 111 票。前回より数は伸びている。立候補、非推薦者が 19 名。
- ⑪その他: 日本地球惑星科学連合大会・サンゴ礁セッションを 09 年 5 月 16 日に開催。これまでどおり学会として継続していく。サンゴの属レベルのワークショップを 09 年 3 月に名桜大学で開催。静岡大会は予算を超過したが、無事に終了。

### 2. 2009 - 2011 年度体制 (敬称略)

会長: 土屋 誠、副会長: 瀧岡 和夫、監査: 坂本 三郎・山本 秀一、会長推薦幹: 酒井 一彦・木村 匡、残る 1 名は野中 正法 (予定)、企画委員長: 鈴木 款、学会賞委員長: 井龍 康文、学会誌編集委員長: 山野 博哉、広報委員長: 藤村 弘行、国際連携委員長: 日高 道雄、安全委員長: 岡本 峰雄、保全委員長: 鹿熊 信一郎、安全委員長: 未定、用語委員長: 茅根 創、選挙管理委員長: 山口 徹、事務局長: 茅根 創

### 3. 2009 - 2011 年度活動計画

以下のように 2009 - 2011 年度活動計画の報告があり承認された。

- ①事務局: 今年度予算は 460 万円を計上。日高会員から、サンゴ礁研究会の残金 16 万円の寄付。広告収入及び会費収入を上げる必要がある。

- ②企画委員会: 今後の企画委員会の主要なミッションは収入増、人材育成、大会運営とする。
- ③学会賞選考委員会: 川口賞は一昨年・去年ともに 2 名だったが、1 名にすることを検討。学会賞は昨年出していないので、是非出す予定。
- ④学会誌編集委員会: Galaxea 11-1 (8 編) が 7 月末に会員に到着予定。和文誌 (11 巻) は、高緯度サンゴ特集。Galaxea 11-2 は、山里前会長追悼特集号で著者増によるコスト増を抑えるためカラー写真は自己負担、縮切りを過ぎて届かないものは本号には載せない、ページ制限をする。査読のある通常部分と査読のない特集部分の合本になる。学会誌に 190 万円を計上。
- ⑤広報委員会: ニュースレター No.42、No.43 を発行予定。評議員会議事録、学会賞・川口賞の情報、大会情報、過去大会のフォトギャラリーを Web 掲載予定。
- ⑥国際連携委員会: 前年度活動を引き続き行う。2011 年にクアラルンプール (マレーシア) で開催される太平洋学術会議について情報提供予定。J-BON (GEO-BON の日本版) との関係については、情報を得てから検討する。
- ⑦保全委員会: 前年度活動を引き続き行う。普及啓発 PT が企画しているインタープリテーション講座は、場合によっては講師旅費を工面したい。広域一斉調査 PT は、役割を果たしたため休止。
- ⑧安全委員会: 委員長の決定を含め、新体制を早期に整える。11 月の大会で安全に関する啓蒙活動予定。
- ⑨用語委員会: 地形学辞典について、依頼原稿受領予定。
- ⑩選挙管理委員会: 今年度は選挙がないため活動なし。
- ⑪第 12 回大会: 今号の NL の大会案内参照。
- ⑫その他: (財) 海洋博覧会記念公園管理財団 総合研究センターで、サンゴの同定に関するワークショップを 4 日間連続で計画。大会のやり方など再検討の時期に来ている。早めに次の開催候補地の議論を始めるべき。沖縄県のサンゴ礁保全推進協議会関連は、引き続き、当協議会副会長の中野氏に任せる。沖縄奨励賞の申込締切りは 9 月 30 日まで。

## 日本サンゴ礁学会 会長・評議員選挙結果報告

選挙委員会委員長 長谷川 均

### ▶ 日本サンゴ礁学会の会長・評議員選挙を実施いたしました。

2009 年 4 月 6 日に公示、5 月 18 日付けで投票用紙等を発送し、5 月 20 日から 6 月 3 日までの間で投票を実施しました。6 月 5 日に開票作業を実施し、当選者へは 6 月 8 日付けの文書で通知しました。評議員当選者のうち、1 名から辞退の申し出があったので、次点の方に打診しこの方の了解を得、6 月 18 日に今回の選挙の当選者、すなわち、会長 1 名、

評議員 27 名を確定しました。今回の選挙の有効投票数は 111 票で、前回は 83 票でしたので投票数は伸びているといえます。右記に当選した方のお名前を記します。

なお、評議員の残り 3 名分は、新会長の指名する幹として残っています。

お名前

#### 会長当選者 (敬称略)

土屋 誠

#### 評議員選挙当選者 (敬称略)

梅澤 有、岡本 峰雄、鹿熊 信一郎、カサレト・ベアトリス、茅根 創、菅 浩伸、佐藤 崇範、下池 和幸、杉原 薫、鈴木 款、中井 達郎、中野 義勝、中村 崇、長田 智史、浪崎 直子、林原 毅、波利井 佐紀、日高 道雄、深見 裕伸、藤村 弘行、緑川 弥生、家中 茂、山川 英治、山口 徹、山野 博哉、渡邊 敦、渡邊 剛 (27 名)

# 日本サンゴ礁学会 第12回大会

## ご案内

日本サンゴ礁学会第12回大会を2009年11月27日～29日に沖縄県本部町中央公民館で開催します。皆様のご参加をお待ちしております。

第12回大会実行委員長：琉球大学熱帯生物圏研究センター 酒井一彦 e-mail: sakaikz@lab.u-ryukyuu.ac.jp

### ▶スケジュール

2009年11月27日(金)～11月29日(日)  
沖縄県本部町中央公民館



### 9月25日(金)

#### 大会参加および発表申し込み締め切り

(電子メールおよび郵送により受付)

### 10月16日(金) 要旨締め切り

(電子メールおよび郵送により受付)

### 10月23日(金)

#### 大会費事前払い振込み期限

(これ以降は当日払いとなります)

### 11月26日(木)

>> 午後 評議員会、各種委員会、自由集会

### 11月27日(金) 大会初日

>> 午前 大会受付、口頭発表

>> 午後 ポスター発表、口頭発表、  
新学術領域ワークショップ公開、自由集会

### 11月28日(土) 大会2日目

>> 午前 口頭発表

>> 午後 ポスター発表、シンポジウム1、  
総会、懇親会

### 11月29日(日) 大会3日目

>> 午前 口頭発表

>> 午後 シンポジウム2

## 大会参加申し込み、および研究発表 申し込み方法

### ●大会参加申し込み・大会費等振込先 (9/25まで)

参加者名簿作成のため、大会にご参加の方は必要事項をご記入の上、9月25日(金) 厳守で大会事務局(酒井宛)までe-mailまたは郵送でお申し込み下さい(郵送の場合は必着)。

#### 【申込先】

酒井一彦  
〒905-0227 沖縄県国頭郡本部町字瀬底 3422  
琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設  
12thjcrs@gmail.com (subjectを"jcrs12 参加申込"とする)

#### 【記入事項】

参加者氏名・所属 (学生の方は、その旨お知らせ下さい)  
参加者連絡先:(勤務・通学先または自宅)住所・電話・Fax・e-mail  
参加内容:発表(有・無)、懇親会(参加・不参加)  
参加費支払い方法:郵便振替(10月23日まで)・当日支払い

#### 【振り込み方法】

(事前のお振り込みにご協力下さい。10/23まで)  
参加登録料:振込み手数料はご負担下さい。

		事前振り込 (10/23)		当日支払い	
		一般	学生	一般	学生
登録料	会員	5,000円	2,500円	6,000円	3,500円
	非会員	7,000円	4,000円	8,000円	5,000円
懇親会費		4,500円	3,000円	5,500円	4,000円

郵便振替口座番号: 01730-8-121488  
口座名称: 日本サンゴ礁学会第12回大会  
通信欄の記入事項: 氏名, 所属, 一般・学生, 懇親会の区別

\*複数の方がまとめて振り込まれても結構です。  
この場合も、上記を明記して下さい。  
\*新規会員の方の登録料は無料です。懇親会費のみをお振込み下さい。

## ●研究発表について

### 1) 研究発表申し込み先 (9/25まで)

研究発表をされる方は、発表題目ごとに必要事項をご記入の上、9月25日(金) 厳守で電子メールによりお申し込みください(郵送の場合はご相談下さい)。  
なお、発表は一人につき口頭・ポスター各1演題までとさせていただきます。

#### 【申込先】

酒井一彦  
〒905-0227 沖縄県国頭郡本部町字瀬底 3422  
琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設  
12thjcrs@gmail.com (subjectを"jcrs12 発表申込"とする)

#### 【記入事項】

発表題目  
発表者氏名・所属  
発表内容の概略(100字程度)  
発表形態: 口頭発表・ポスター発表を選択。口頭発表は、液晶プロジェクターの使用が可能です。発表形態は、人数等の都合で実行委員会にて調整させていただきます。ご希望に添えない場合もごさいますが、予めご了承下さい。  
ポスター発表にはプレゼンテーション賞を予定しておりますので、奮ってご参加下さい。

### 2) 要旨集原稿作成要項、および送付先 (10/16まで)

要旨集の原稿は、10月16日(金) 厳守で電子メールによるPDF添付または郵送により送付ください(郵送の場合は必着)。

#### 【送付先】

酒井一彦  
〒905-0227 沖縄県国頭郡本部町字瀬底 3422  
琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設  
12thjcrs@gmail.com

#### 【要項】(レイアウトの統一にご協力下さい)

用紙サイズ:  
A4 1枚, 上下 3cm・左右 2.5cmをあける  
書式:  
(一行目) タイトル MS ゴシック, 14pt, 中央揃え

(二行目以降) 氏名 MS 明朝, 12pt, 中央揃え  
発表者氏名の前に○印

(三行目以降) 所属 MS 明朝, 10pt, 中央揃え  
(四行目以降) 本文 MS 明朝, 12pt, 中央揃え  
(最終行) キーワード MS 明朝, 12pt, 中央揃え  
"キーワード:" に続けて入力  
その他: 図表、写真は適宜貼りこんで下さい。

[電子メールによるPDFファイル添付送信の場合]  
WindowsまたはMacintoshのどちらで作成したかが分かるようにsubject(件名)をそれぞれ「JCRS12 要旨 win」「JCRS12 要旨 mac」としてください。  
特殊なフォントを使用される場合は必ずフォントの埋め込み設定を行ってからPDF化してください。

## シンポジウム1 (準備中)

- 日時: 11月28日(土) 午後
- 場所: 本部町中央公民館大ホール
- 仮題: 『二酸化炭素増加がサンゴ礁域の海洋生物に及ぼす影響-分子から生理、生態まで-』
- 詳細は後日、学会 ML および web に掲載します。

## シンポジウム2 (準備中)

- 日時: 11月29日(日) 午後
- 場所: 本部町中央公民館大ホール
- 仮題: 『サンゴの生物学研究の現状』シンポジウム2は、故山里清先生の追悼シンポジウムです
- 詳細は後日、学会 ML および web に掲載します。

## 公開ワークショップ (準備中)

- 日時: 11月27日(金) 午後
- 場所: 本部町中央公民館大ホール
- 仮題: 『新学術領域研究「サンゴ礁学の新たな展開」』
- 詳細は後日、学会 ML および web に掲載します。

## 自由集会 (準備中)

- 日時: 11月26(木)・27(金) 夕刻
- 場所: 本部町中央公民館小ホール、他
- 本大会からの新しい試みとして、学会参加者が自由に企画する集会を募集し、採択された企画には大会委員会が実施場所のみを提供し、集会の実施は企画者に委ねる「自由集会」を数件採択する予定です。
- 詳細は後日、学会 ML および web に掲載します。



学会の Web ページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcrs/>) から参加・発表の申し込みフォーム(Excel ファイル)がダウンロードできます。こちらに記入してe-mailで添付送信すると大変便利です。このファイルでは参加と発表の申し込みが一度に行えます。その際の subject は "jcrs12 参加発表申込" としてください。

日本サンゴ礁学会各位

日本サンゴ礁学会では、平成 21 年度日本サンゴ礁学会賞授賞候補者及び日本サンゴ礁学会川口奨励賞（以下、川口賞と略）授賞候補者の推薦を公募いたします。

1 学会賞

学会賞は、国内外のサンゴ礁に関連する研究、調査を対象とする優秀な業績を挙げ、かつ学会へ多大な貢献をした学会員に贈られるもので、受賞者には今年秋の総会において、賞状が授与されます。推薦者の方（自薦も可）は、応募書類一式を本年 9 月 15 日までに（当日消印有効）、郵送あるいはメールの添付書類にて選考委員長（井龍）あてお送り下さい。応募書類は返却致しません。

受賞者には学会大会において受賞講演を行っていただくとともに、原則として日本語で日本サンゴ礁学会誌に受賞記念論文をご執筆いただくことになっております。

〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻  
井龍 康文  
Tel: 052-789-2533  
E-mail: iryu.yasufumi @ a.mbox.nagoya-u.ac.jp  
（郵送の場合は、「サンゴ礁学会賞応募書類在中」と朱書して下さい。メールの場合は、件名を「サンゴ礁学会賞応募」として下さい。受け取り確認のメールを 1 週間以内に出しますので、それが届かない場合はお知らせ下さい）

2 川口賞

川口賞は、国内外のサンゴ礁に関連する研究、調査を対象とする優秀な業績を挙げた若手の学会員に贈られるもので、受賞者には今年秋の総会において、賞状、メダル、および賞金が授与されます。賞の対象となる若手の年齢は、平成 21 年 11 月末日に 38 歳以下の方とします。推薦者の方（自薦も可）は、応募書類一式を本年 9 月 15 日までに（当日消印有効）、郵送あるいはメールの添付書類にて選考委員長（山野）あてお送り下さい。応募書類は返却致しません。

受賞者には学会大会において受賞講演を行っていただくとともに、原則として英語で Galaxea, Journal of Coral Reef Studies に総説をご執筆いただくことになっております。

〒305-8506 茨城県つくば市小野川 16-2  
国立環境研究所地球環境研究センター  
山野 博哉  
Tel: 029-850-2477  
E-mail: hyamano @ nies.go.jp  
（郵送の場合は、「川口賞応募書類在中」と朱書して下さい。メールの場合は、件名を「川口賞応募」として下さい。受け取り確認のメールを 1 週間以内に出しますので、それが届かない場合はお知らせ下さい）

3 応募書類

応募書類の書式は自由ですが、以下の項目を含むこととします。

- (1) 推薦者氏名
- (2) 推薦者の所属および役職（または身分）、住所、連絡先（Tel、Fax、E-mail）
- (3) 授賞候補者の氏名
- (4) 授賞候補者所属および役職（または身分）、住所、連絡先（Tel、Fax、E-mail）
- (5) 授賞候補者略歴（生年月日、学歴、職歴、賞罰、資格等）
- (6) 授賞対象となる研究・調査の内容、学会への貢献等および推薦理由（2~3千字程度とします）
- (7) 授賞候補者の業績リスト  
7a 原著論文：著者名、論文タイトル、掲載された雑誌名（書籍の場合は編者名も記載して下さい）、巻（号）および頁、発表年を明記し、査読を経て出版されたものとそうでないものは分けて下さい。  
7b 総説：記載事項は原著論文と同様とします。  
7c その他の著作（報告文、研究紹介文など）  
7d その他の特筆すべき事項（特許、新聞雑誌等の紹介記事など）
- (8) 参考資料：川口賞のみ。論文別刷、特許、紹介記事のコピー等の参考資料 5 編以内を添付して下さい。

連載 3

サンゴ礁関連施設  
深訪 INQUIRY  
-21-

産業技術総合研究所  
地質情報研究部門

鈴木 淳  
305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1  
産総研つくば中央第7  
a.suzuki @ aist.go.jp  
http://staff.aist.go.jp/a.suzuki/

昔の名前は、「地質調査所」産総研は、2001 年の省庁再編の際に設立された新しい研究所（独立行政法人）ですが、その前身は旧・工業技術院傘下の 15 の研究所です。私の所属する地質情報研究部門は、旧・地質調査所が母体になっており、創設は 1882 年（明治 15 年）に遡ります。旧・地質調査所は現在、地質調査総合センター（つくば中央第7事業所）と呼ばれていて、地質情報研究部門のほか、地圏資源環境研究部門、活断層・地震研究センターの3つの研究ユニットがあります。旧・地質調査所の英語名は「Geological Survey of Japan」、略称は GSJ で、これは今でも使用しています。

ミッションは、地質情報の整備 キーコンセプトは「地球をよく知り、地球と共生する」。陸域だけでなく、海域研究も盛んです。現在、第二白嶺丸による沖縄海域プロジェクトを実施中。昨年8月、沖縄本島東岸海域の地下構造や表層堆積物調査

を実施しました。今年は、本部半島からケラマ諸島に掛けての海域を調査します。南は宮古・八重山諸島、北はトカラ列島までの海域についての調査が計画されています。サンゴ礁よりちょっと外側の少し深い海域が対象で、深海サンゴや有孔虫の分布調査も実施しています。毎年 5 月頃に、調査補助の学生アルバイトさんの募集をします。海洋調査に関心がある方の応募お待ちしております。

地球温暖化と海洋酸性化 海洋、なかでもサンゴ礁は、現在進行している地球温暖化の影響を大きく受けることが危惧されています。水温の上昇、海面上昇、降水パターンの変化、台風の強化、そして海洋酸性化など、過去から現在への海洋環境の変遷の解明と将来予測は、私たちにとって大切な研究課題です。特に、私の所属する物質循環研究グループでは、サンゴ骨格を材料に、地球化学的手法を用いて古気候を復元する研究を実施しています。

統合国際深海掘削計画にも参加 「ちきゅう」という掘削船をご存知ですか？ 2003 年にスタートした統合国際深海掘削計画（Integrated Ocean Drilling Program, IODP）の中心となっている日本の地球深部探査船です。産総研は、IODP にも積極的に参加しています。IODP の対象は深海底だけではなく、今年の秋には、いよいよグレートバリアリーフでのサンゴ礁掘削が実施されます。私も乗船研究者として参加します。ケアンズ沖のリボンリーフの沖合斜面ほか、タウンズビルを寄港地として約 60 日間の掘削航海になります。海水準の変動とサンゴ礁の形成についての工

キサイティングな結果が得られることと思います。

標本館あります 2005 年のつくばエクスプレス開業以来、ずいぶん便利になりました。秋葉原駅からつくば駅まで快速 45 分。第7事業所には地質標本館が併設されていて、ジオ君が皆さまをお待ちしています（無料、土日祝日も開館）。ぜひ、一度お越し下さい。



ジオ君は、地質標本館の公式マスコットです（絵：河村幸男）。毎年 5 月 10 日は「地質の日」で、今年は「国際地球惑星年」です。産総研では「ジオパーク」活動も推進しています。

## 世界のサンゴ礁の現状： 2008年版 (Status of Coral Reefs of the World: 2008) の紹介

Status of Coral Reefs of the World: 2008, Edited by Clive Wilkinson,  
©Global Coral Reef Monitoring Network, www.gcrmn.org

GCRMN  
GLOBAL CORAL REEF  
MONITORING NETWORK

世界のサンゴ礁保全の国際的な枠組みである国際サンゴ礁イニシアティブ (ICRI) が、地球規模サンゴ礁モニタリングネットワーク (GCRMN) を通じて 2 年に 1 度発行している世界のサンゴ礁の現状報告書「Status of Coral Reefs of the World」の 2008 年版が 12 月 9 日に発行されました。

この報告書は、編集者のクライブ・ウィルキンソン博士 (GCRMN グローバル・コーディネーター) が、世界 96 カ国、372 名のサンゴ礁の研究者や管理者などの専門家による原稿をまとめて作成されたものです。

報告書では、世界各国でサンゴ礁の衰退が報告される中、健全なサンゴ礁も残っていると言う報告もあるが、今後の地球規模の気候変動は、海洋の水温上昇や酸性化などサンゴ礁にも大きな影響を及ぼし、決して楽観視はできないことが述べられています。

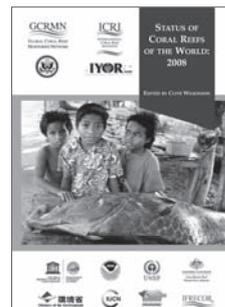
それらの見解は以下のように要約されています。  
・1950 年以來、世界の本来のサンゴ礁域の 19% が「機能を消失」してきた；  
・サンゴ礁の 15% は今後 10 年から 20 年以内に消失の可能性がある、「危機的な」状況にある；  
・20% は 20 年から 40 年までに失われると予測されるような、「深刻な」状態にある；  
・世界のサンゴ礁の 46% は健全であり、すぐに破壊されるような状況ではない；

ただし、これらの予想は、現在では予測不可能な地球規模の気候変動の影響を除いてあるので、今後高水温や酸性化等がサンゴに大きな影響を及ぼすと、これらの状況はさらに加速することが予想されます。

この報告書はもともと、行政や政府関係者などサンゴ礁管理者に現状を認識してもらい、保全に対する取り組みを推進するため、科学的なデータをもとに分かりやすくサンゴ礁の現状を解説するもので、ICRI のサンゴ礁保全戦略の一つとして

1998 年から作成、発行されてきました。しかし、発行に係る資金を調達することが年々難しくなっており、地域毎や各国毎の取り組みにシフトしていくことも期待されています。その意味では日本サンゴ礁学会も、国内及び東アジアのサンゴ礁に対して、何らかの貢献ができるのではないのでしょうか。

なお、これまで発行された全ての報告書は、GCRMN のホームページ (<http://www.gcrmn.org/publications.aspx>) からダウンロードできます。



表紙の写真

(財) 自然環境研究センター：木村 匡  
tkimura@jwrc.or.jp

## 11<sup>th</sup> ICRS “Call to Action”



2008 年 7 月にフロリダで第 11 回国際サンゴ礁シンポジウム (11<sup>th</sup> ICRS) が開催されてから、早 1 年が経とうとしています。

11<sup>th</sup> ICRS 終了後、同じ会場で国際サンゴ礁イニシアティブ (ICRI) の総会が開催され、直前の 11<sup>th</sup> ICRS の成果が報告されましたが、その際、第 10 回の沖縄大会 (10<sup>th</sup> ICRS) で発表された「沖縄宣言」のような、最新の知見に基づいたサンゴ礁保全の緊急性を世間にアピールする宣言文があった方がいいという意見がでました。この ICRI での提言に基づいて、大会組織委員長長の Richard Dodge 氏、7 人のスーパーチャーター、ISRS 会長の Richard Aronson 氏らを中心に、「11<sup>th</sup> ICRI Call to Action」(行動の呼びかけ) が作成されました。この文書は、SCIENCE (AAAS, VOL 322) に投稿された後、2009 年 4 月に開催された ICRI 総会でも報告され、そこでの議論で、さらに今年 12 月にコペンハーゲンで開催される気候変動枠組条約第 15 回締約国会議 (COP15) などでも発表されることが決まりました。

Call to Action の中身を見てみると、「沖縄宣言」よりさらに強い口調で、世界のサンゴ礁が危機に瀕していること、保全のために緊急な対策が必要なことなどが訴えられています。その一方で、サンゴ礁を救うのに今さらまだ間に合うこと、

11<sup>th</sup> ICRS がそのための手段や希望を示す機会となったこと、我々にはそのための知識も手段もあることなど、ポジティブな側面も示されています。ただし、それには我々が断固たる行動を取らないといけないと警告しています。緊急に実施すべき行動として、以下の 10 項目 (仮訳) が提唱されています。ちなみに、「沖縄宣言」では 4 項目でした。

- 二酸化炭素排出量を低減し、政策立案者に低炭素による経済成長にコミットするよう働きかける
- サンゴ礁生態系においてオープンアクセスの漁業をなくす
- プダイを含むサンゴ礁藻食動物を保全する
- 禁漁区 (no take area) を含む海洋保護区ネットワークを設置し厳格に管理する
- 海洋保護区以外の海域も効果的に管理する
- サンゴ礁と関連生態系との間のコネクティビティを維持する
- 各地のサンゴ礁の状態を定期的に調査し、一般に情報を発信する
- 陸域での活動がどう海洋環境に影響を与えているかの理解を深める
- 各地において関係者間で健全なサンゴ礁のイメージを共有し、それに向けてのロードマップを作成する
- 目的とする成果を得るために管理の変革に努める

Call to Action は、より多くの人々がこれらの行動にコミット (署名) するよう求めて結ばれています。6 月 29 日現在で、世界中の 1273 人の署名が集まっています。(注) この記事は署名を勧めるものではありませんので、各自の判断で行ってください。



(c) 11<sup>th</sup> ICRS : <http://www.nova.edu/ncri/11icrs/sympimages.html>

関連 URL :  
・11<sup>th</sup> Call to Action 原文 (英) と署名欄 :  
<http://www.nova.edu/ncri/11icrs/calltoaction.html>  
・大会結果概要と Call to Action のパンフレット (PDF)  
[http://www.nova.edu/ncri/11icrs/11icrs\\_outcomes\\_calltoaction.pdf](http://www.nova.edu/ncri/11icrs/11icrs_outcomes_calltoaction.pdf) (\* 上の写真がパンフレットでも使われています)  
・沖縄宣言 :  
[http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/icrs2004\\_j/declaration\\_j.html](http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/icrs2004_j/declaration_j.html) (和)

紹介記事：広報委員会 日比野 浩平

## ～ サンゴの海を活かした環境教育プログラムを目指して ～ 「とかしくスノーケリングツアー」

国立沖縄青少年交流の家は沖縄本島の西方約32 kmに浮かぶ渡嘉敷島にある青少年教育施設です。渡嘉敷島を含む慶良間諸島の島々は、沖縄国定公園やラムサール条約に指定された海域が広がる美しいサンゴ礁の海に囲まれています。この世界的にも貴重なサンゴ礁の海を有するフィールドを舞台に、青少年の体験活動を中心とした事業や研修支援を展開しています。

また、近年、白化現象やオニヒトデの食害などの影響を受け、本来の姿を失いつつあるサンゴ礁の海の環境教育や環境保全活動へも力を入れ、教育施設としてのアプローチを探っています。これまで、環境教育プログラムとして、数々の事業を展開してきましたが、今回は2009年3月に実施した1泊2日の「とかしくスノーケリングツアー」を紹介します。

本事業は当施設で実施している従来の海洋研修プログラム「体験スノーケリング」に、サンゴ礁の健康診断である「リーフチェック」の視点を取り入れた環境教育プログラム開発として実施しました。

初日は、参加者のスノーケリングのスキルチェックを目的に実習を行い、夜間には沖縄リーフチェック研究会の安部真理子氏をお招きし、「リーフチェック」の概要を学びました。

二日目の午前、阿嘉島臨海研究所を訪れ、谷口洋基氏の案内で施設見学などを行いました。午後、地元のダイビングショップを運営する番田武六氏のガ

イドで「リーフチェック」の視点を取り入れたスノーケリングツアーを行いました。渡嘉志久湾に住み着くアオミガメを観察した後、渡嘉志久湾の3つのポイントで観察を行いました。参加した方からは「違う視点で海の生き物を見ることができました。」との声が寄せられました。

将来は、チェックシートを作成しウォークラリーの様なゲーム感覚で、楽しみながらサンゴ礁の海を体験し学習できるプログラムとしての展開を考えています。また、定められたポイントを観測することで貴重なデータになることも期待しています。多くの青少年が当プログラムを体験することで、サンゴ礁の定点観測や環境保全活動に参加し、サンゴ礁の海を見守る参加型の環境教育及び環境保全システムの確立を目指しています。

これまで様々な面で、多くの方々の力をお借りして参りましたが、さらに、そのネットワークを広げ、より多くの方々にサンゴ礁の海の魅力を伝え、環境を考える機会を提供していきたいと考えております。

青少年教育を担う当施設とサンゴやサンゴ礁に関する研究活動及び環境保全活動を行う組織や機関が連携することで青少年の発達段階に合わせたサンゴの海を活かした魅力ある取り組みが期待できるのではないのでしょうか。ぜひ、皆さまのご意見やご支援を頂きたいと思っております。



写真：上）阿嘉島臨海研究所の見学の様子  
 下）渡嘉志久湾の様子

「国立沖縄青少年交流の家  
 (ホームページ：http://okinawa.niye.go.jp)」  
 企画指導専門職 中村 元

〒901-3595  
 沖縄県島尻郡渡嘉敷村字渡嘉敷 2760  
 TEL: 098-987-2306 FAX: 098-987-2318  
 URL: http://okinawa.niye.go.jp/  
 e-mail: h.nakamura@niye.go.jp

## It's Time to Fly! 4

### 青年海外協力隊のすすめ



写真1：ハナダイの群れとハマサンゴの一種。アカバのサンゴ礁は非常に魚が多い。



写真2：大きなウスカミサンゴの群体。いろいろな種類の大きなサンゴ群体が、そこ中に見られる。



写真3：ゴミが散乱している海底。



写真4：海で遊ぶヨルダンの人たち。ヨルダンの人たちは服を着たまま海で遊んでいる。泳ぐというよりつかるといった方が適当かもしれない。

私は2002年12月から2年間、中東のヨルダンという国に青年海外協力隊員として赴任しました。ヨルダンという国の場所を知っている人は少ないと思いますが、イラクとイスラエルの間という、多くの人がわかるのではないのでしょうか。

青年海外協力隊は国際協力機構(JICA)の事業の一つで、発展途上国に原則2年間滞在し、技術協力を行います。職種は生態調査や環境教育などがあり、派遣先を自由に選ぶことはできませんが、希望を出すことができます。普段行かない国に行けたり、派遣前訓練(主に語学、私はアラビア語を学習しました)があたりするの、協力隊ならではの魅力ではないでしょうか。日本以外のサンゴ礁を知らない

私にとっては、紅海の健全なサンゴ礁を見たことは、貴重な経験になりました。また、途上国での環境問題について知ることができ、視野が広がったように思います。日本で取り上げられる環境問題は、地球温暖化や生物多様性などが多いですが、途上国では、衛生環境など人の生死や健康に関わる問題が多く、先進国と途上国の環境に対する意識の違いは勉強になりました。

協力隊として私が赴任した先は、アカバ(Aqaba)という港町でした。ヨルダンで唯一紅海に接するアカバは沿岸が27kmしかありません。そのため、貿易等の船舶の往来、マリネジャーなどの観光業、海水を冷却水として利用する工業など海を必要とする産業が、この27kmの地域に集中してい

ます。このような地域特性を考慮し持続可能な開発を行うため、市街地や産業地域などの土地利用を定めた土地利用計画が作られています。その中に自然環境に関する保護区が設定されており、人の立ち入りが制限されています。

アカバのサンゴ礁は、土地利用計画や規制などがあり、サンゴ礁が保全されているように見えるのですが、海の中にはゴミがいたるところに落ちています。ドラム缶、タイヤ、プラスチックコップ、皿などさまざまなゴミが海の中に散乱しています。これは、人々がゴミをゴミ箱ではなく、そのまま路上などに捨ててしまうためです。ゴミをゴミ箱に捨てるという意識が非常に低いようです。また、ヨルダンの主な宗教は

イスラム教というも、海への意識が低い要因の一つかもしれません。イスラム教は人前で肌を出すことをよいことと考えないため、ヨルダンの人たちは泳げない人が多いのです。海に親しむ機会が少ないため、海を大切にするという思いもあまりないのかもしれません。

アカバのサンゴ礁を見ることで、世界にはいろいろなサンゴ礁があるということや、ところ変わればサンゴ礁との関わり方も違うということを実感できたことは非常に貴重な体験でした。また、青年海外協力隊の経験をとおり、日本を見つめ直すよいきっかけにもなりました。就職活動中の学生のみなさん、青年海外協力隊はいかがですか？

連載 4

若手会員の  
眼 34

A young member's eye

近畿大学農学部  
水産学科 水産生物学研究室  
畑 啓生 (はた ひろき)  
e-mail: hata @ nara.kindai.ac.jp



みなさん、こんにちは。近畿大学農学部水産学科講師の畑啓生です。私は京都大学在学中に度々海に通ううち、サンゴ礁を研究フィールドにしたいと願って修士課程で当時東北大学の西平孝孝先生(サンゴ礁学会前会長)の門を叩きました。以来、沖縄の瀬底島や、石垣島、西表島、最近ではインド-太平洋各地

サンゴ礁でなわばり性スズメダイと、そのなわばり内の藻類との種特異性や共生関係について調査を行ってきました。最近ではアフリカのタンガニカ湖や日本の淡水域でも藻食魚について研究していますが、もともとサンゴ礁の眩いような生物多様性に心を打たれて研究を志しましたので、今後もサンゴ礁で研究を続けたいと意気込んでいます。

今日は私たち水産学科水産生物学研究室の、主にサンゴ礁での活動について紹介させていただきます。近畿大学水産学科と言えば、すなわちクロマグロの完全養殖と多くの方がお考えではないでしょうか。昨年こちらの研究室に来た当初は、それまで理学研究科にいて、ヒトを含まない生物種間の関係性を研究してきた私が、この水産学科でどのような貢献ができるのだろうかと思ひました。そして一つのアイディアががやがや浮かんできました。クロマグロの養殖は、奄美大島のサンゴ礁の海で行われているのです。奄美大島と、南の加計呂島間と

に挟まれた大島海峡は、暖かく穏やかなため、クロマグロの生育や繁殖に適した海です(そのおかげで現在では毎年クロマグロ親魚の産卵に成功しています)。一方でここは本来サンゴ礁の海で、あちこちにサンゴ群落が発達しています。さらに、養殖生質を固定するために水深3mに張り巡らされたロープ上には、この10年の間に少なくとも20属のサンゴからなる見事なサンゴ群落が蟹気楼のように立ち現れているのです(写真1)。しかし大島海峡は内海でありよどみやすく、近年ではオニヒトデの大発生に襲われてサンゴ群落が大規模な被害を受けています。そこで私たちは、ここをフィールドとして、水温の上昇など様々な環境要因の変動と養殖との相互作用がサンゴ群落に与える影響を調べることで、また病原体などを介した養殖場と周辺サンゴ礁とつながりを調べることを通して、サンゴ礁の海での養殖が、周辺のサンゴ礁に過剰な負荷を掛けず持続的に進めるよう保つことを目指して研究を行っています。

これらの調査は今年1月に始まったばかりで、調査に携わるのは現在のところ卒業研究生の日比野紘大君と私の2名ですが、フィールドには恵まれていると考えています。ご興味を持たれました方は是非ご一報下さい。調査の間には2m、200kgを超えるクロマグロが真っ黒な口を大きく開けて生け簀の中をびゅんびゅん泳ぎ回っている壮観な様をご覧ください。

いつか当研究室をこのニュースレターの「サンゴ礁関連施設探訪」で紹介させて頂ける日が来ることを目指して頑張りたいと思います。今後とも、ご指導、ご支援をよろしくお願い致します。



▲写真1: 養殖生質固定用ロープ上のサンゴ群落

NPO/NGO 紹介

- 14 -

日本自然保護協会 (NACS-J)

現場の知識と実行力で、日本の自然を守る



▲写真: ジャングサウォッチの様子

日本自然保護協会(NACS-J)は、ダムに沈もうとしていた尾瀬の保護運動を契機に設立、自然保護問題を具体的に解決するために半世紀以上活動してきたNGOです。政府の外郭団体ではなく、会費や寄付などを主な資金に、科学性・自主性・独立性を持った自然保護、政策提言、調査研究、環境教育の活動を展開しています。

NACS-Jが、海辺(とくにサンゴ礁)の保護活動に本格的に関わるきっかけは、白保の新石垣空港建設問題。1980年代後半から、キャンペーン「ニライカナイ・ユー」をはじめ、独自委員会を設置して科学的根拠を持って「生態系としてのサンゴ礁の価値」を国内外にアピールしてきました。

白保で培われた経験をもとに、その

後、三番瀬や諫早といった干潟の開発問題、泡瀬干潟や辺野古の沖縄島埋立て計画の問題などに展開し取り組んできました。

米軍飛行場移設計画のある辺野古・大浦湾では、海草藻場の市民参加型モニタリング調査「ジャングサウォッチ」を2002年から開始し、その手法を普及するとともに、辺野古海域の海草藻場の重要性を明らかにし、リーフ上の沖合案がいかにか影響をもたらすかを問題提議してきました。2006年に辺野古崎をまたぐ沿岸案(V字滑走路)に変更が合意され、辺野古に隣接する大浦湾全体に及ぼす影響が心配されているなか、沖縄リーフチェック研究会など地元団体によって大規模な「チリビシのアオサンゴ群集」が発見されました。2008年にWWFジャパンなど

自然保護団体、地元NGO、サンゴ礁地理研究者とともに合同調査を実施し、その全容と特徴を明らかにしました。このアオサンゴ群集は、大浦湾の環境条件をたくみにとらえて生育し、白保のアオサンゴ群集とは形状も分布も異なることがわかり、生物多様性の豊かさを象徴しています。昨年更新された「IUCN(国際自然保護連合)レッドデータ2008」では、アオサンゴが開発や乱獲から絶滅危惧種に新たにリストに掲載され、世界的に貴重な存在になっているといえます。

アオサンゴをはじめとする豊かなサンゴ礁と様々な深さや広がりをもった大浦湾の特異性から、この海域の生物多様性の豊かさを解説したリーフレット(\*)を本海域の環境アセスメントの準備書の一般市民への公告縦覧時

(財)日本自然保護協会  
保護プロジェクト部 大野 正人

期(2009年4-5月)に合わせて発行しました。この準備書に対して学者や住民、自然保護団体などから合計約5,000通の意見書が届けられ、今後、沖縄県環境影響評価審査会や知事、環境大臣などからどのような意見が出されるのかが注目されています。

サンゴ礁を含む浅海域は、港湾計画や海岸防備、海砂採取など人為による開発にさらされ、他の自然生態系に比べても保護地域の設定や保全施策などが立ち遅れています。

各地の現場の知識と行動力と連携することにより、NACS-Jはサンゴ礁の生物多様性が保全されるよう活動していきます。そのためにはサンゴ礁に携わる研究者のみならずのご協力とご尽力が不可欠です。

\*リーフレット「辺野古・大浦湾 アオサンゴの海 生物多様性が豊かな理由(わけ) - 合同調査でわかったこと」ダウンロードできます。  
[http://www.nacsj.or.jp/old\\_database/henoko/henoko-090423-hokoku.html](http://www.nacsj.or.jp/old_database/henoko/henoko-090423-hokoku.html)

- 団体概要: 1951年設立、1960年に財団法人となり現在に至る
- 会員数: 約2万3千人 職員27名、役員等44名
- 住所: 〒104-0033 東京都中央区新川1-16-10 ミトビル2F  
TEL: 03-3553-4103 FAX: 03-3553-0139
- 代表者: 理事長 田畑 貞寿
- E-mail: ohno @ nacsj.or.jp
- ホームページ: <http://www.nacsj.or.jp/>
- 機関誌: 会報「自然保護」隔月6回/年

編集後記

今回、初めてニュースレターの編集を担当しました。初めてで戸惑ったりミスをしたりと、かなりいっぱいいっぱいでしたが、みなさんに助けていただいで、無事発行することができました。  
編集担当 浪崎



日本サンゴ礁学会ニュースレター [2009 / 2010 No.1]  
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.42

● 編集・発行人/「日本サンゴ礁学会広報委員会」  
藤村 弘行・安部 真理子・梅澤 有・鈴木 倫太郎・中村 崇・浪崎 直子・日比野 浩平・渡邊 敦  
● 発行所/日本サンゴ礁学会 ● 事務局/茅根 創 <kayanne @ eps.s.u-tokyo.ac.jp>  
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358